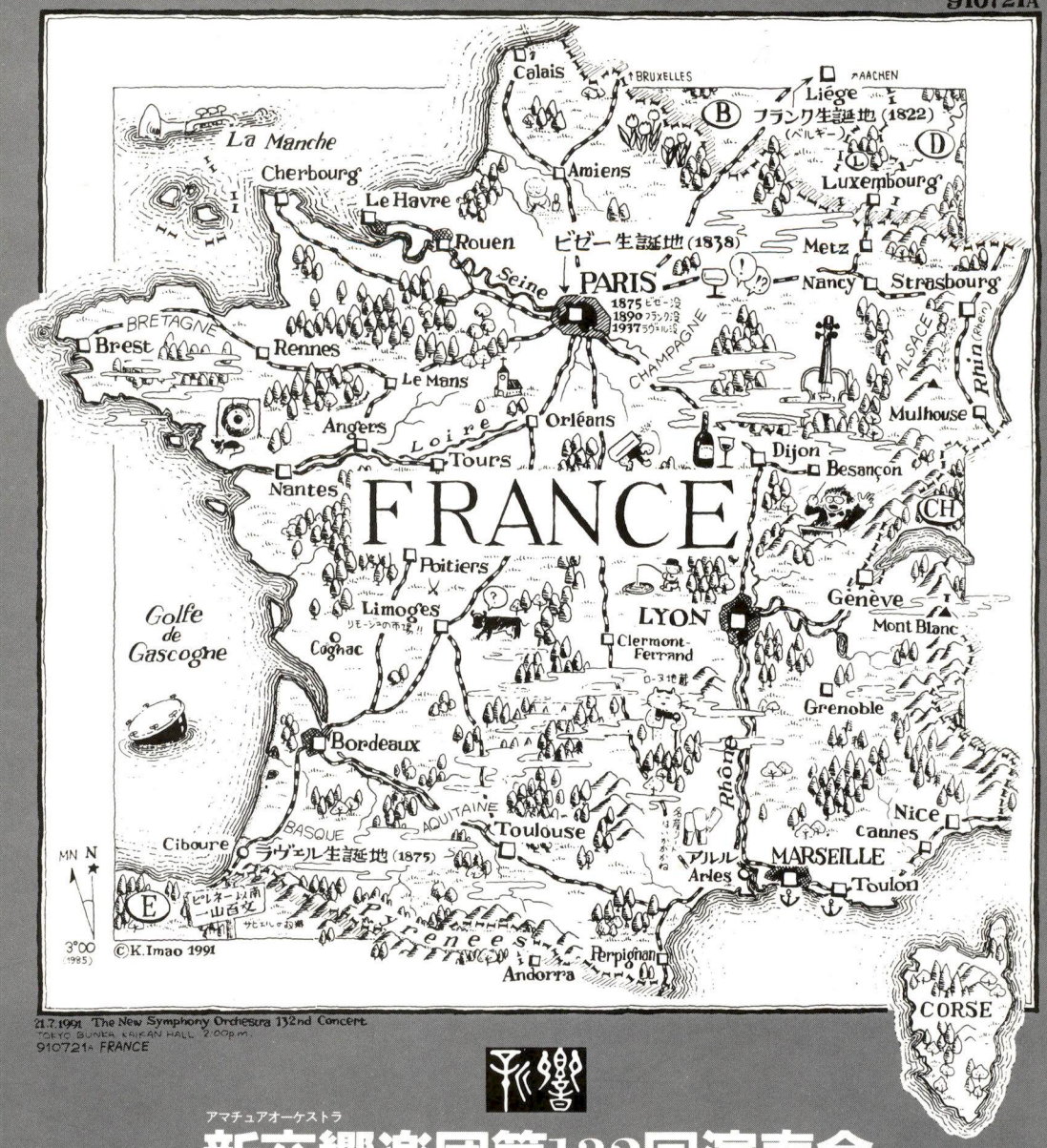
910721A



21.7.1991 The New Symphony Orchestra 132nd Concert
TOKYO BUNKA KAIKAN HALL 2:00p.m.
910721A FRANCE

アマチュアオーケストラ

新交響楽団第132回演奏会

THE NEW SYMPHONY ORCHESTRA The 132nd Concert

1991 **7.21**(日)2:00pm

東京文化会館

(上野駅公園口前)

Tokyo Bunka-kaikan Hall (JR Ueno Sta. Koenguchi-exit)

フランク：交響曲ニ短調

César Franck : Symphony d-minor 1888

ラヴェル：道化師の朝の歌

Maurice Ravel : Alborada del gracioso 1918

ビゼー：「アルルの女」第1組曲・第2組曲

Georges Bizet : "L'Arlésienne" Suite No.1&2 1872

指揮：山田 一雄

(新交響楽団名誉指揮者)

YAMADA Kazuo, Conductor

アマチュアオーケストラ

新交響楽団第132回演奏会

フランク：交響曲ニ短調

César FRANCK：Symphony d-minor, 1888

第1楽章：Lento – Allegro non troppo

第2楽章：Allegretto attacca

第3楽章：Allegro non troppo

――――休　憩――――

ラヴェル：道化師の朝の歌

Maurice RAVEL：Alborada del gracioso, 1918

ビゼー：「アルルの女」第1組曲・第2組曲

Georges BIZET："L'Arlésienne" Suite No.1 & 2, 1872,1879

第1組曲

1．Prélude, Allegro deciso – Andantino – Andante molto

2．Minuetto, Allegro giocoso

3．Adagietto, Adagio

4．Carillion, Allegro moderato – Andantino – Tempo I

第2組曲

1．Pastorale, Andante sostenuto assai – Andantino – Tempo I

2．Intermezzo, Andante moderato ma con moto – Allegro moderato

3．Menuet, Andantino quasi Allegretto

4．Farandole, Allegro deciso – Allegro vivo e deciso

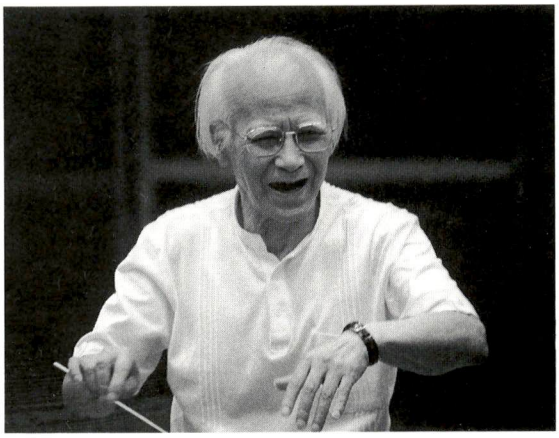
1991年7月21日(日)2:00 p.m.

東京文化会館

主催：新交響楽団

指揮

山田　一雄



写真：桜井哲雄

1912年東京生まれ。1935年、東京音楽学校ピアノ科卒業、37年専攻科修了。マーラーの弟子プリングスハイムに作曲を学び、日本放送協会懸賞１等、ワインガルトナー賞などを得て作曲家としての地位を築く一方、ローゼンシュトックに指揮法を学ぶ。1941年新交響楽団（現N響）補助指揮者、翌42年、日本交響楽団と改組の際、専任指揮者に就任。マーラーの交響曲第８番、ストラヴィンスキー「春の祭典」、ベートーヴェン「荘厳ミサ曲」等、多くの日本初演、邦人作品初演を手掛け、日本の音楽界の指導的役割を果たした。現在、京都市交響楽団芸術顧問正指揮者、新星日響名誉指揮者、日本マーラー協会理事長等をつとめる他、東京芸大、武蔵野音大等で指導にあたっている。76年紫綬褒章、78年芸術選奨文部大臣賞、84年勲四等旭日小綬章、86年芸術院賞を受けた。84年より当団名誉指揮者。

セザール･フランク

交響曲ニ短調

作曲年代：1885年～1886年
楽器編成：フルート２、オーボエ２、イングリッシュホルン１、クラリネット２、バスクラリネット１、ファゴット１、ホルン４、トランペット２、コルネット２、トロンボーン３、テューバ１、ティンパニ、ハープ１、弦５部
演奏時間：約40分
初　　演：1887年１月９日　パリ音楽院にて

セザール・オーギュスト・フランク（1822―1890）は19世紀フランスを代表する作曲家でフランス近代器楽音楽の父「父フランク」として親しまれている。フランス人として知られているが生れはベルギーのリエージである。リエージは大教会のある古都で、フランクはここの音楽学校に入学し早くから才能を発揮した。14歳のときパリに移住、まもなくパリ音楽院に入学し、教師やオルガニストとして確実に歩んで行った。1853年サント・クロティルド教会の楽長に就任、58年にはそこのオルガニストとなり、以後この職からは一生離れなかった。72年からは母校のオルガン教授を務めるかたわら作曲家としても活躍し、73年フランスに帰化した。90年事故がもとでこの世を去った。

フランクの特徴は、第一に深い信仰を持った作曲家といえる。彼は敬虔なカトリック信者であり前述のようにサント・クロティルド教会のオルガニストを長く務めた。音楽はすべて瞑想的で哲学的である。決して情熱的に燃え上がるということはない。ゆっくりと頂上に向かって昇って行ったかとおもうと静かに降りてくる。常に謙遜な態度で神の前にひざまづいて祈ることによって真理の光に近づこうとしているようである。このようにフランクは地味ではあったが真摯な態度で音楽にむかい着実にすすんでいったので弟子の信望を集め「フランキスト」というグループができた。この中にはダンディ、ショーソン、ピエルネらがいる。

また、フランクは純粋な器楽の分野で成功した作曲家といえる。軽快なオペラが盛んであった当時の

フランスにおいて、いくつか声楽の入ったオラトリオを残してはいるが主要な作品は交響曲や室内楽曲で、交響的変奏曲、ピアノ五重奏曲、ヴァイオリンソナタなどを残している。

形式的な面では、「循環形式」を確立した。これは同じ主題（循環動機）を各楽章に繰返し用いて全体を統一する手法で、同様な方法はベルリオーズ、リスト、ワーグナーにもみられるが、フランクは純器楽の絶対音楽に用い、より洗練されたものにした。フランクは主にバッハやベートーヴェンを学んだが、半音階的な進行を用いるなど新ロマン主義のワーグナーやリストの影響も受けている。

交響曲ニ短調はフランク唯一の交響曲であるが、この一曲によって交響曲作曲家とよばれるにふさわしい風格と完成度を備えている。３楽章から成るが、第２楽章後半にスケルツォ的な部分をもつので通常の４楽章形式と考えてよい。全体は循環形式により、循環動機は第１楽章の冒頭および第２楽想、第２楽章の主要主題で、この３つの主題が全楽章を通じ繰り返し現れる。第１楽章はソナタ形式、第２楽章は２つの三部形式、第３楽章はソナタ形式である。

（Hrn. 稲葉　正宏）

モーリス・ラヴェル

道化師の朝の歌

作曲年代：1918年に編曲（原曲のピアノ曲《鏡》は1905年）
楽器編成：ピッコロ、フルート２、オーボエ２、イングリッシュホルン、クラリネット２、ファゴット２、コントラファゴット、ホルン４、トランペット２、トロンボーン３、テューバ、ティンパニ、大太鼓、小太鼓、シンバル、トライアングル、タンブリン、カスタネット、シロフォン、クロタル（アンティック・シンバル）、ハープ２、弦５部
演奏時間：約８分
初　　演：1919年　パリ

モーリス・ラヴェルは1875年、スペイン国境に近いピレネー山麓の町に生まれた。父ジョセフ・ラヴェルはスイス国籍の技師であった。母マリア・ドルアールはバスク地方の出身である。生後三カ月で一家はパリへ移住。音楽愛好家の父は、モーリスに音楽教育を施した。やがて彼はパリ音楽院で学ぶことになる。22歳から、フォーレに作曲を学ぶが、この頃彼はマラルメやポーなどの詩を愛好した。音楽ではエリック・サティの神秘的なハーモニーとシャブリエの南国的で陽気な気質に影響を受けた。彼が作曲家としてデビューしたのは1898年である。それ以降、脳疾患で病床に伏すまで、幅広い音楽活動を行った。

彼の作品の中には、「道化師」をはじめ「ハバネラ」「スペイン狂詩曲」「ボレロ」など、スペイン色の濃い作品がみられる。これは彼の母がスペインの中でもとりわけ民族色の濃いバスク地方（バスクはフランス・スペイン両国にまたがっている）の出身であったことに起因するであろう。しかし彼と親交のあった音楽家カルヴォコレッシは「彼のスペイン音楽はこの上なくフランス的であり、彼こそ最もフランス的なエスプリをもった音楽家であった」と述べている。

ところで音楽作品は超時代的なものであること同時に、当時の社会的状況との関係を無視するわけにはいかない。モーリス・ラヴェルの生きた1875～1937年のヨーロッパは第一次世界大戦を経験し、次に忍びよる不気味な戦乱を予期しつつ束の間の繁栄と平和を楽しんでいた。この間を特にフランスでは「ベル・エポック（良き時代）」と呼ぶ。モンマルトルの赤い風車（ムーラン・ルージュ）に象徴されるような、華やかで享楽的な気分が時代を覆っていたからである。エッフェル塔で知られる1889年のパリ万博も特筆すべきであろう。そこには“万博”の名のもとに、ヨーロッパの人々に広く東洋の文化を広く知らせる場が設けられた。また、文学界においてはプルーストが、哲学においてはベルグソンの時代であった。これらの要因が作曲家ラヴェルにどのような形で影響したのであろうか。

管弦楽曲「道化師の朝の歌」には原曲がある。も

とは、ピアノ曲《鏡》の第四曲目で、これをラヴェル自身がオーケストラ用に編曲したのである。

この曲は6/8拍子と9/8拍子のリズムが交りあい、華やかなアルページオが用いられ、スペイン情緒を譲し出している。また、道化役者が物憂げに、しかし朗々と歌いあげるファゴットの独奏部、そしてフルートやハープなどのグリッサンドもこの曲の重要な構成要素となっている。ところで、編曲とはいうものの、この曲は初めからオーケストラのために書かれたのかと思われるほど、管弦楽曲として独立している。そこには、「オーケストレーションの魔術師」としてのラヴェルの姿がうかがわれるのである。

(Vn. 阿部　美由起)

ジョルジュ・ビゼー

「アルルの女」
第1組曲・第2組曲

作曲年代：第１組曲・1872年／第２組曲・1879年
楽器編成：ピッコロ、フルート２、オーボエ２（イングリッシュホルン持替）、クラリネット２、ファゴット２、アルトサキソフォン、ホルン４、トランペット２、コルネット２、トロンボーン３、ティンパニ、プロヴァンス太鼓、大太鼓、小太鼓、シンバル、ハープ、弦５部
演奏時間：第１組曲　約18分／第２組曲　約16分
初　　演：1872年　パリ

先日、電車の中で、「アルルの女」の練習がはじまって以来、ずっと疑問だったことの答えにはたと行き当たった。忘れないうちに書き留めておこう。

その疑問とは、「アルルの女」で大活躍するアルト・サックスが、最後のファランドールではなぜ一音も出番がないのかということである。クライマックスの興奮の中で、なぜサックスだけがぽつねんと沈黙を強いられるのだろうか。

疑問解明のきっかけは、ファランドールの練習のときのヤマカズさんのひと言だった。「ここは主人公が失恋して倉庫の上から飛び降り自殺する場面の音楽なんだから、もっとそのやりきれない感じを出して！」

この曲がそんな悲劇の音楽だとは、まったく意外だった。そこでさっそく「失恋投身自殺」に興味をそそられた私は、近所の図書館に名曲解説全集を見にいった。そこに書かれていたのはおよそ次のようなことである。

1．曲の成り立ち。仏の文豪ドーデーの戯曲の劇中音楽としてビゼーが作曲した27の一管編成の管弦楽曲から、ビゼー本人が４曲選んで二管編成の組曲にまとめたのが第一組曲。のちにビゼーの友人ギローが他の４曲を組曲としたのが第二組曲。

2．劇の筋書き。舞台はフランス南部プロヴァンス地方アルルの町の近郊にあるカマルグ村（大湿原の自然保護区として有名）。村の旧家の跡とり息子フレデリはアルルで出会った美しい女との結婚を望むが、周囲の大反対にあう。そこでフレデリはアルルの女をあきらめ、彼を慕っている幼なじみの隣村の娘と結婚しようと決意する。ところが婚約の日になって、フレデリはアルルの女と牧場番の男とがその日の晩に駈落ちするという話をたまたま耳にしてしまう。激情に狂った彼は、祭に村中が沸き返る中、穀物倉の高窓から中庭に飛び降りて死んでしまう。

3．フレデリの白痴の弟の存在。プロヴァンス地方では「白痴の児は家の不幸を防ぐ」という言い伝えがあった。この劇には終始白痴の弟が登場するが、劇の進行とともにだんだんと正気をとり戻していく。ということは不幸がひたひたと迫ってくることを表わしている。また、第一組曲の前奏曲では、アルト・サックスによって白痴児の動機が演奏される。

この３が大事なポイントだということに、電車に乗ってはじめて気がついた。つまりこういうことだ。アルト・サックス＝白痴児＝不幸を防ぐもの。ファランドール＝不幸≠アルト・サックス。もはや救いようのない悲劇の待ちうけているファランドールには、アルト・サックスの出る幕はないのである…。

さて、皆さんはどうお考えになりますか？

(Cl. 末村　洋子)

アマチュアオーケストラ
新響が団員を募集しています

新交響楽団は創立約30年、いろいろな人たちによって自主運営されているアマチュアオーケストラです。ヒラから社長までにわたるサラリーマン、学校の先生、学生、独身貴族もいれば主婦もお父さんもいます。
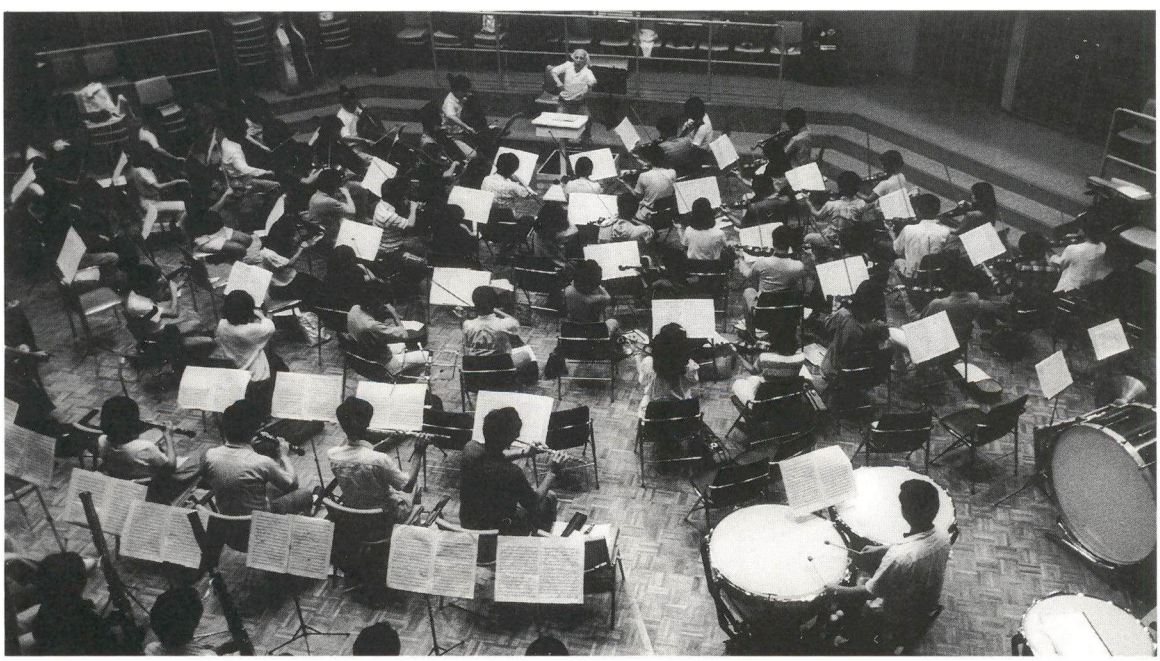
新響の宣伝をさせてください。まず、「アマチュアのオーケストラ」を前面に出していること。プロの亜流みたいな演奏はしたくないのです。プロは生活がかかっていますが、私たちは音楽を楽しむためにお金を払います。だからこそ、払う価値のある活動をしたいと思っています。具体的に言えば、あまり知られていない優れた曲を紹介したり、プロよりはるかに多く愚直ともいえる練習を重ねることによって曲に深く接近することなど、いろいろな試みを企画することです。

新響が最近行った主な演奏会には次のようなものがあります。

・日本の交響作品展（邦人による隠れた名曲を発掘。約10年がかりで多くの作曲家の作品を演奏。指揮＝芥川也寸志。このシリーズはサントリー音楽賞を受賞しました）
・中国作品展（作曲家・独奏者を中国より招聘）
・マーラー・チクルス（交響曲全曲を演奏。指揮＝山田一雄）
・ショスタコーヴィチ交響曲第４番日本初演（指揮＝芥川也寸志）
・ヒロシマ・レクイエム（細川俊夫氏に新曲を委嘱、初演。指揮＝今村能）

今後も積極的にアマチュアオーケストラとしての可能性を探っていきたいと考えています。そのためにあなたの力が必要です。文章が長くなりました。何よりもまず一度、練習をご覧ください。いつでも歓迎です。

練習――――毎週土曜６～９時、東京文化会館中リハーサル室他。なお練習時の託児制度があります。
募集パート――弦楽器（特にチェロ）、木管・金管・打楽器。
お問合わせ先――市川☎0425(62)4595



株式会社 フォンテック
〒167 東京都杉並区荻窪5-22-5
TEL. 03-3393-0183

fontec

伊福部芸術の集大成
喜寿記念 第1弾!

交響二題
伊福部 昭の世界❶

交響頌偈「釈迦」(1988～89)
ＳＦ交響ファンタジー第１番 (1954/83)*

今年、喜寿を迎えた作曲家、
伊福部 昭の大作、交響頌偈「釈迦」――
ひとつの境地に入った大家ならではの作品です。
この他、東宝特撮映画音楽を演奏会用に再構成した
ＳＦ交響ファンタジー第Ｉ番を収録。

石井 眞木＝指揮
新交響楽団
合唱団ＯＭＰ
千葉大学合唱団
FOCD3140 ¥3,100(税込)
('91. 1. 19/'84. 11. 23*)



8/25発売!

■芥川／新響三十年の軌跡 〈好評発売中〉■



芥川也寸志 管弦楽選集
交響管絃楽のための音楽(1950)、絃楽のための三楽章(1953)、交響曲第1番(1955)、エローラ交響曲(1957/8)
FOCD3208 ¥3,008(税込)



芥川也寸志 管弦楽選集(続)
●芥川也寸志の世界―1
交響三章(1948)、
チェロとオーケストラのためのコンチェルト・オスティナート(1969)、
アレグロ・オスティナート(1986)、武蔵坊弁慶(1986)
FOCD3243 ¥3,000(税込)



早坂文雄 管弦楽選集
●芥川也寸志の世界―2
古代の舞曲(1937)、左方の舞と右方の舞(1941)、
映画音楽「羅生門」から(1950)、管弦楽のための変容(1953)
FOCD3244 ¥3,000(税込)



伊福部 昭 管弦楽選集
●芥川也寸志の世界―3
交響譚詩(1943)、タプカーラ交響曲(1954/79)、
ヴァイオリン協奏曲第2番(1978)
FOCD3245 ¥3,000(税込)



日本の交響作品展 ●芥川也寸志の世界―4
平尾貴四男/古代讃歌(1937)、
松平頼則/南部子守唄を主題とするピアノとオルケストルの為の変奏曲(1939)、
小倉 朗/管弦楽のための舞踊組曲(1953)、
片岡良和/抜頭によるコンポジション(1961)、
菅原明朗/アコーディオンのための協奏交響曲(1979)
FOCD3246 ¥3,000(税込)



ソヴィエト・中国交響作品展
●芥川也寸志の世界―5
ショスタコーヴィチ/交響曲第4番 Op.43(1935/36)
李 煥之/春節組曲より"序曲―大秧歌"(1955/56)
呉 祖強/二泉映月
FOCD3247 ¥3,000(税込)



日本の交響作品展(続)
●芥川也寸志の世界―6
渡辺浦人/交響組曲「野人」(1941)
小倉 朗/交響組曲 イ短調(1941)
戸田邦雄/交響幻想曲「伝説」(1943)
小山清茂/管弦楽のための「信濃囃子」(1946)
別宮貞雄/管弦楽のための「二つの祈り」(1956)
FOCD3265 ¥3,000(税込)



清瀬保二 管弦楽選集
●芥川也寸志の世界―7
原始的舞踊(1933/64)、エレジー(1937)、
古代に寄す(1937)、ピアノ協奏曲(1954)、
日本祭礼舞曲(1940/42)、佐藤敏直/哀歌(1982)
FOCD3266 ¥3,000(税込)



小倉 朗 管弦楽選集
●芥川也寸志の世界―8
日本民謡による五楽章(1957)、オーケストラのためのブルレスク(1959)、交響曲ト調(1968)、弦楽合奏のためのコンポジション(1972)、オーケストラのためのコンポジション(1975)
FOCD3273 ¥3,000(税込)

■いま、細川俊夫の音宇宙は、未明の領域へと拡張する



ヒロシマ・レクイエム――音宇宙Ⅳ
細川俊夫
弦楽四重奏曲第２番「原像」(1980)
ヒロシマ・レクイエム(1989)
今村 能＝指揮　新交響楽団
アルディッティ弦楽四重奏団
田中信昭＝合唱総指揮 他
FOCD3108 ¥3,100(税込)

新響あとらんだむ

新響が NHK「英会話Ⅰ」に出演

新響がこの7月、NHK 教育テレビ「英会話Ⅰ」に出演しています。チェロのジョン・ブロウカリングは以前から NHK テレビの英会話番組の講師をつとめていますが、今シリーズではちょっと趣向を変えて、彼の大学での授業風景なども含めた日常生活をおりまぜながら「新響で活躍するジョン」がドキュメンタリー風に描かれています。番組は5回連続で、すでに第3回まで放映されましたが、興味のある方はぜひご覧ください。

第4回はジョンが指揮者フランシス・トラヴィス氏（第131回演奏会の指揮者）宅を訪れ、友人とともにチェロと琴の二重奏を披露するという内容で、第5回は4月21日に行われた新響第131回演奏会の当日。楽器搬入から舞台裏の様子、そして本番に至るまでの風景を中心に放映されます。日程は下記の通り。

NHK 教育テレビ「英会話Ⅰ」放送予定

〈ジョンのオーケストラ〉

第4回：7月23日(火) 7：00／24日(水) 22：00
Haru-no-umi

第5回：7月30日(火) 7：00／31日(水) 22：00
The day of the concert

＊放送時間はいずれも20分間。

団員自作のプロヴァンス太鼓

本日の「アルルの女」第二組曲のパストラールとファランドールで使われるプロヴァンスの太鼓を打楽器の田中司さんが作りました。田中さんは小学校の理科の先生ですが、太鼓作りの名人。子供たちに実際に太鼓を作らせることで「音の性質」を身をもって学ばせるというユニークな授業を長年続けています。今まで数知れぬほどのいろいろな太鼓を作った実績をもとに、このプロヴァンス太鼓に挑戦しました。

まず問題は胴。教材の太鼓はちょうどルネサンス音楽で使うぐらいの大きさの木製のくずかごを底を抜いて利用していますが、プロヴァンス太鼓は超深胴。こんな長細いくずかごはないので、まずベニア板を曲げ加工することを試みましたが、うまくいかずに断念。そしてひらめいたのが学校の近所のガソリンスタンドにいつも放置してあるエンジンオイルか何かの缶。この缶はもちろん金属製ですが、フチの部分が丸めてあって、皮を張るのにちょうど都合がいい。その面に皮を張り、二つの缶の底を抜いて背中合わせに接着剤で貼り合わせました。皮の張力はルネサンスの太鼓のように紐の張りを変えることで簡単に調節できるようにしてあります。

あとでヤマカズ先生にうかがったら「僕は本当にアルルで女の子に見せてもらったんだけど、すごく胴が深くて、クルミの木で作るんだね。あの辺はそこらじゅうにクルミの木があるらしい」とのこと。新響に新しく加わったこの楽器も、音はなかなかクルミです。まあ、あとは奏者の技量にかかっていますが…。

新響が管弦楽作品を募集

新響では来年4月11日に行われる第135回演奏会のための管弦楽曲を公募しています。もちろん「新作初演」は歓迎ですが、1988年以降に書かれた再演曲も対象とします。

選考にはこの演奏会の指揮者である石井眞木氏が団の運営委員会・技術委員会とともにあたります。入選曲への賞金などはありませんが、作曲者立会いのもとで時間をかけて入念なリハーサルを行うことによって意欲的な演奏を行い、その作品にお応えするつもりです。独自の主張を持った優れた管弦楽作品の応募を心よりお待ちしています。応募要項および応募用紙の請求は

〒230 横浜市鶴見区豊岡町21-9
オデオン堂・門倉 昭一まで。

（文責：Perc. 今尾　恵介）


愛する心で、応答願います。
今くちずさんでいるその歌を、大切にしたいから。
歌をくちずさむ気持ち、音楽を愛する心を大事にしてください。
JASRACは、著作権の管理を通して世界の音楽を守っていきます。
あなたは、音楽を愛する心で少し、
詞や曲をつくった人たちのことを考えてみてください。
JASRAC
日本音楽著作権協会
理事長　石本美由起
〒105 東京都港区西新橋1-7-13　☎(03)3502-6651